

## J・M・ホイッスラー作《肌色とピンクのシンフォニー：フランシス・レイランドの肖像》考察——モデルの描写、フォーマット、展示空間に着目して——

河野碧（東京藝術大学）

《肌色とピンクのシンフォニー：フランシス・レイランドの肖像》は、ジェームズ・マクニール・ホイッスラー（1834-1903）がパトロンフレデリック・レイランドから自身の妻を描くよう依頼を受けて制作した肖像画で、画風確立期の作である。本作に関して、ロックナン（1984）やメリル（1998）が、レイランド家の伝記的情報や作品の依頼状況を明らかにし、その後ガラッシ（2003）やウォール（2013）が、レイランド夫人が新奇な趣向のドレスを着ていることから、ファッションに着目した論考を展開した。しかし、人物が背面観で捉えられていること、カンヴァスが縦に長く横に狭いことといった、肖像画の慣例から逸脱した要素については未だ十分に論じられていない。本発表はレイランド夫人の肖像を、モデルの描写、フォーマット、展示空間の3点から分析することによって、ホイッスラーの肖像画様式の特異性を指摘することを目的とする。

本作において、モデルは鑑賞者に背中を見せ、個人を同定するうえで重要な部位である顔を横に向け、目を伏せている。前例が少なく、肖像画に相応しくないこのポーズがどのような視覚的効果をもつのかを、他の肖像画の作例と比較しながら考察する。

次にフォーマットに注目する。ホイッスラーは肖像画を制作する際、等身大で全身像の人物像を横幅の狭いカンヴァスに描くことを好んだ。その結果、モデルがある空間にゆとりをもって配置されているというより、人物の身体に合わせてカンヴァスが切り詰められているかのような印象を受ける。過去の肖像画と比べながら、これがホイッスラーの肖像画のひとつの際立った特徴であり、鑑賞したときの印象に大きく影響を及ぼすことを示す。

最後にポーズやフォーマットの特徴が展示空間でどのように機能したのかを論じるため、1874年のロンドン、パル・マルでの個展に焦点を当てる。1877年、依頼主と画家はレイランド邸の装飾、ピーコック・ルームを巡り絶縁した。さらにその2年後、夫妻は離婚する。レイランド自身の肖像だけは屋敷の階段部分に飾られていたとされるが、夫人のものが展示されていたかは不明である。しかしホイッスラーは、それら是一对であるべきだと考えていた。そのため個展での展示が、画家の想定した効果を発揮するようにこの2点が配された唯一の機会だったと言えるだろう。ホイッスラーは壁紙の色との兼ね合いや、それぞれの作品の位置に入念な注意を払い、肖像画7点を多数のエッチングや素描とともに飾った。肖像画と展示空間に対する評価を、批評家たちの言葉から紐解きたい。

これらの考察を通して、ホイッスラーの肖像画の革新性とは、写実的にモデルを描くという肖像の本来の機能を抑制し、モデルの描写やフォーマットを工夫することにより、展示空間を装飾する機能を高めた点にあったと結論付ける。